キズナエピソード

環はなび　２話

//ヴィジュアルノベル形式開始

//とびお自室

自分の部屋についてようやく、

俺ははなびから受け取ったお金を数えてみた。

53万円あった。

戦闘民族も驚くほどの額だ。

//次ページ

たしかに、お金は欲しかった。

だがそれは、昼飯のやり取りレベルの話だ。

こんな大金、望んでいない。

やはりこれは……。

//暗転

//ヴィジュアルノベル形式終了

//ADV形式開始

//都立有羽・教室

［とびお］

「おい。お前、何やったんだ？」

［とびお］

翌日。俺は賭けに誘った友人を問い詰めていた。

［友人］

「何って、賭けだよ。

渋谷の学生とかフリーターの間で流行ってる大規模賭博

俺も先輩に誘われて始めたから、詳しくは知らないけど……」

［とびお］

「規模でかすぎだろ……。

で、その博打の責任者は誰なんだ？」

［友人Ａ］

「責任者……胴元か？

それなら、お前も会っただろ？

はなびって子さ」

［とびお］

薄々そんな気はしていたが、やはりか。

俺は昼休み、はなびに連絡を入れると、

放課後に会う約束を取り付けたのだった。

//暗転

//カフェ店内

［はなび］

「アンタならまた連絡くれると思ってたよ」

［とびお］

カフェで俺の顔を見るなり、

はなびは気さくに話しかけてきた。

だが俺はただ、彼女の前に封筒を差し出す。

［はなび］

「これは……なに？」

［とびお］

「俺は、何かを当てる遊びが楽しかっただけなんだ。

この金は君に返す」

［はなび］

「おいおい。勝ったのはアンタだよ。

賭けるって言ったのもアンタ。」

［はなび］

「負けた奴からはキッチリ取り立てるし、

勝った奴にはしっかり支払う。

その責任を果たさないと、私のツキが落ちる。」

［とびお］

「俺の友達が勝手に賭けたんだ。

知らなかったんだから、無効だろ」

［はなび］

「ビビリだねぇ。

……それじゃあ、こうしよう」

［はなび］

「この金は、来週の月曜までアタシが預かっておく。

アンタは、当てる遊びをしてくれればいい。

私がアンタの金を使って、代わりにベットする」

［はなび］

「そうやって遊んでいって、

種銭が無くなったら、ゲーム終了。

もうギャンブルは紹介しない。それでどう？」

［とびお］

「……わかった。それでいい」

［はなび］

「よし」

//暗転

//ADV形式終了

//ヴィジュアルノベル形式開始

//背景：黒

どうせ外しまくって、いつかは無くなる。

……そう考えていたのが甘かった。

もちろん、予想を外して元金が減ることはあったが、

そういう時に限って次には大きく当ててしまう。

預けている金は、どんどん増えていった。

//ヴィジュアルノベル形式終了

//ADV形式開始

//カフェ店内

［とびお］

「くそっ！　なぜだ！？」

［はなび］

「ふふっ。アンタは数奇な運命の持ち主だねぇ。

今日月曜だけど、どうする？　清算しとく？」

［とびお］

「笑ってないでなんとかしてくれ！

金が無くなるんじゃなかったのか!?」

［はなび］

「金がなくなる、なんて言ってないよ。

それに、普通だったら無くなるしね。

アンタの運の良さが特別なんだよ」

［とびお］

「こんなギャンブル、さっさと辞めたいのに！」

［はなび］

「ははっ。

口ではそう言いつつも、心では楽しんでいるんじゃない？」

［とびお］

「そんなわけ――」

//ADV形式終了

//ヴィジュアルノベル形式開始

ない、という一言が、すぐに口から出てこなかった。

お金を賭ける感覚。

外したときの絶望。

当てたときの昂揚。

何度も賭けていくうちに、

たしかに俺は少しずつ楽しさを感じていた。

だが、それを認めたくはなかった。

//次ページ

そんな葛藤を見透かしたかのように、

はなびはにやにやと俺の顔を眺めていた。

//ヴィジュアルノベル形式終了

//2話終了